11. 摂食拒否を含めた重度な身体化症状を呈した20代女性への箱庭を用いた心理療法

福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
荒川　英香，一瀬　瑞絵，松本　貴智
矢部　博興

【目的】

摂食障害は近年，発達障害との合併に注目が集まっており，特に知的障害と自閉スペクトラム症（ASD）の合併例では摂食拒否が多い（Fodstad & Matson, 2008）。我々は低体重をきたし摂食障害が疑われた青年期女性に対して，主治医の精神療法と薬物療法に加え，心理療法の導入を行った症例を報告する。本発表は本人･保護者からインフォームド･コンセントを得て，匿名性の保持に配慮を行った。

【症例】

20代前半の女性。軽度知的障害（IQ=56），ASD疑い。X年3月，低体重をきたし当院に紹介，約4ヶ月間の入院加療を行った。言葉での訴えは少なく，身体化症状がみられた。そのため，非言語的療法を検討し，週1回の箱庭療法が導入された。

【経過】

患者はアンパンマンとその仲間を用いて箱庭を表現した。箱庭の内容，スタッフとの現実の交流や空想上の関わりなどファンタジーが語られた。

特別支援学校へ登校を再開すると学校での葛藤を箱庭で表現するようになった。この時期，身体化症状は軽減し，体重も増加した。X+1年3月学校卒業後，過去のいじめを語り，箱庭では自身が山に埋まった作品を作るようになった。患者は山の高さが自身のつらさを表すと語り，セラピストがスケーリングとしてリフレーミングを行った。

X+1年5月の休息入院を機にデイケアが導入された。デイケアではセラピストを求め，アピール的行動が見られたため，支持的に接しながら適応的行動を促した。X+1年11月には箱庭の山が小さくなり，患者から「死にたいという気持ちが減ってきたからじゃないですか」と語られた。

【考察】

当初，発話の少なさやファンタジーの混入など言語化に難しさが見られたが，箱庭療法を続けるなかで葛藤を言語・非言語的に表出することができ，身体化症状が治まり，体重増加を認めた。箱庭療法は本人にとって困り感を説明するツールとして有効であったとともに，一つのスケーリングとして自身の状態を振り返る方法になったと考えられる。

12. 行動の変容が期待できず深まらないまま継続されるカウンセリングの意義を考える

福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
杉山　惣一，松本　貴智，玉木　大数
矢部　博興

【目的】

精神科臨床における心理療法において，一定の安定をえるものの，大きな改善への手応え感がなく，一見すると漫然と心理療法が経過してしまうことがある。今回提示する症例を通して，変化へのモチベーションが弱い患者への心理療法の意義について考察する。

【症例概要・心理療法の経過】

症例Aは，50歳代の男性で，気分変調症とアルコールの物質使用生涯の診断でX－15年3月より精神科的治療が開始された。若い頃より過剰な飲酒，家族への暴力をくり返し，仕事も転々とし不安定な生活が継続していた。

X年7月より演者が心理療法を引き継ぎ，診察日に合わせて月1回の心理療法が開始され，中断することなく継続し，自分自身を内省することはできていた。しかし，現状を変更していこうとする試みは弱く，家族関係（特に父親）に触れると回避的で，承認欲求を満たして欲しい思いが伝わるばかりであり，演者は戸惑いと無力感を感じることが続いた。また，X＋1年6月に父親が逝去する事態が生じたが，深い悲しみよりも「自分はどうでもいい存在」と思考し，感情に触れることも困難な様子であった。

このようなAの生活体験に関する演者の感想や認識を丁寧に伝える中で，停滞していた就労に向けて動き出す行動の変容も見られるようになった。

【考察】

Aとの心理療法において，演者は意味を見いだせず心理療法の中止を申し出たい心境となったが，別の角度から見ると，Aにとっては心理療法が安定した生活の一部として機能し，その時間の語りが自己肯定感を得る営みであるとも考えられた。

全ての心理療法を深い自己理解に結びつけようとすると，返って患者と治療者がともに二次的な傷つきを生じる可能性がある。心理療法導入のアセスメントが大事であるが，「深まらない」ことの安心感の提供も心理療法のプロセスとして有用であるかもしれない。（本研究は患者より同意を得て発表しています）